

～キリンの引っ越し～

小 松 守

（秋田市大森山動物園～あきぎんオモリンの森～園長）



人は心のどこかに思い出をしまい込んで生きる動物のようでもある。思い出は経験が元だから年と共に積層する。懐かしいもの、思い出したくないものまで様々で、人生とも重なる。

人生の大半を動物園で過ごしてきたが、開園50年を迎える動物園の歴史を整理していると、折に触れ時々生きて動物が心に浮かんでくる。動物たちは時に強烈な、時に微笑ましい思い出として登場してくれる。

本欄コラム、少し趣を変え今回から思い出に登場する動物にまつわるエピソードを紹介してみたい。初回はキリンに登場してもらおう。キリンには実に思い出深いものが多い。大森山の歴史や動物園づくりに、さらには生と死を考える大きなきっかけにもなるなど重要な役割を果たしてくれた動物だ。

本題に入る前に、私なりのキリン理解を少々述べてみたい。誰もが知るキリンはアフリカのサバンナで疎らに生える高い木々の枝葉を食べて生きる動物だ。独特な長い首と脚を活かし優位に生きるが、それは逆に欠点にもなっている。重心の高いキリンはバランスを崩すと命取りになるし、首や脚のトラブルは死に直結しやすい。悲しいが死が呆気なく来る動物だ。

閑話休題、キリンのひとつの思い出は、今から約30年前の1991年の春、3頭のキリンを東京から秋田まで運んだ時のことだ。当時は展示動物の充実と今の動物園のカタチづくりの最終盤の時代だった。飼育の経験がないキリンを大森山に運び入れ、アフリカゾウと共に同年4月1日に公開することが既に発表されていた。

まだ寒い3月、東京から700km離れた秋田に大動物3頭を一気に運ぶのは神経をすり減らす仕事であった。当時の東京は新都庁完成で丸の内から新宿副都心への引っ越しもあり、某TV局がこれに掛け「ザ・引っ越し」と銘打ったキリン引っ越しの追っかけ取材もあった。

輸送業者との間で輸送ルートや受け入れ方法など綿密な計画が練られた。背が高いキリンは座位で運びたくなるが、思いのまま座らせることはできないし、長時間の座位は筋肉損傷の危険が高いため立たせて運ぶ。だが、高さは4mにもなり道路交通法の高さ制限を超えるため、キリンには輸送箱内でずっと首を前に伸ばし続けてもらうしかないのだ。

運ぶキリンは、小ぶりの雄「のび太」と背の高い大人雌「モモ」と「ナナ」の3頭だ。輸送隊は、先導車、小ぶりの雄を積んだ平ボディトラック、大きなモモとナナを載せた超低床トレーラー車、しんがりの統括車の4台で車列が組まれた。飼育員がトラックに、私はしんがり車に乗った。キリン3頭を一気に輸送することは事例も少なく、胃の痛くなる仕事であったことを覚えている。

当時、東北自動車道は東京ー盛岡間は既にながっていたが、一般道はまだ狭いなど難しい道路事情でもあった。鉄道ガード下や交差点などを通過するたび、統括車の無線は鳴りっぱなしだった。私も常にハラハラし高ぶっていた。

車列は高速に入ると安定して走った。ただ、3月の夜はまだ寒く、走行中、モモとナナの頭が落ち着きなく動くのが分かり、その度にSA

に入り、給餌し休ませ、シートで風よけもつくった。心配は増すがもう走るしかなかった。キリン輸送はイノチがけのようなもの、我々も眠る余裕もなく緊張状態であった。

キリンも人もしだいに慣れ、車列は順調に北上した。日の出は希望の光にも思え少し穏やかな気分になったのを覚えている。盛岡が近づいた頃、前を走るキリン運搬車のずっと先に青空を背景にした岩手山が重なり、アフリカ・キリマンジャロを望むサバンナを彷彿とさせ実に感動的だったのを今でも鮮明に思い出す。

高速道路を出て国道46号線に入った。山越えと下りのつづら折りは想定上の難所、下りの何度目かのカーブに差し掛かった時、輸送箱から見えていたのび太の顔がずっと消えた。ダウンしたのか、一瞬青ざめた。近くの峠の茶屋パーキングまで走り、急ぎ確認した。皆、焦っていた。箱によじ登り中を確認。のび太はキョトンとしながら目をくりくりさせ、こちらを見てくれた。無事な様子に引きつった皆の顔は安堵の笑みに変わった。餌も食べたし、のび太は軽量だから座らせたまま走る事にした。まだ脚の未発達な若いキリンは夜通しの移動がこたえたのか、それとも車酔いなのか？

ひと休み後、秋田に向けひた走った。3頭を早く地上に降ろしてやりたかった。車列は秋田市に入り、昼頃に最後の難所、浜田口から大森山公園への狭く急な坂道に差し掛かり、キリンを載せた車はエンジンをうならせ登った。

その時だった。湧いて出たように子どもたちが現れ、興奮しながら「おおー、キリンだ！キリンだ！」と歓声を上げながらトラックと並走してくれた。私の胸に熱いものが込み上がり、目頭もどこか潤んでいた。徹夜の疲れは吹っ飛んだ。子どもに与えたキリンの力を感じ、動物園っていいもんだと改めて思った瞬間でもあった。

こうして運ばれたキリンは無事お披露目され、動物園の人気ものになったのは言うまでもない。

のび太もその後立派に成長し、モモとナナの間にそれぞれ子どもをつくった。しかし、残念なことにのび太は97年に蹄に問題を抱え、立てなくなり間もなく亡くなった。

それは大森山のキリン飼育の大ピンチでもあった。雄キリン探しが急務となった。国内中を探し見つけ出したのが翌98年、私が園長になった時だった。だが、大きな課題が突き付けられた。雄の居場所は1,700kmも離れた遠い九州、大分の動物園、5歳の体の大きなキリンだった。輸送の大変さが痛いほどわかっていし、長時間の輸送に耐えられるだろうか。考えれば考えるほど心配で不安が募った。経験豊富な動物園に相談もしたが、大きな雄での1,700kmもの長距離輸送に誰しもが難色を示した。

決断は園長の責任でもあった。迷いもあったが大森山のキリンの将来を思うと腹をくくった。機会を逃せば、いつまた雄キリンが見つかるかわからないし、雌の年齢も考えると先延ばしにはできない。ぐずぐずしていると冬になり運べなくなる。9月までに運ぼうと。

大分から瀬戸内海のフェリーを使いキリンの負担軽減も図った。30時間近い長旅になるがやるしかなかった。大分の飼育員にも同行をお願いし、慎重に慎重に運んでもらった。無事の到着を念じた。

運送は意外に順調で、雄は何事もなく夜中、秋田に到着した。こちらの心配をよそに雄は輸送箱からゆったり歩き出てキリン舎に入ってくれた。どっしりとした雄キリンの風格を見せながら。名は「ジュン」、すぐに子どもをつくった。モモとの間に生まれた子キリンがあの「たいよう」である。ジュンを運ばなければ生まれなかった子だ。輸送の決断は結果的に間違っていないのだろう。動物の仕事は難しい。

キリンは時に私に様々な決断を迫ってきた存在でもあったし、人に様々な思いを抱かせる不思議な力を持った動物である。